

エッセイ

日本語を学ぶ子どもと向き合う

私の英語習得回顧録

山崎 遼子*

© 2019. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

アメリカオレゴン州のポートランドで週に一度、日本語クラスを担当している。場所は知人のヨガスタジオ。幼児クラスと小中学生対象のクラスを設けている。

小学生の生徒、リノ（仮名）はとても意欲的に日本語を学ぶことができる。先日、リノがこんな文を書いた。

ももちゃんがにほんごがこうを やります。でせんせいを たすける。あとれねるので
それのあと みんなを たすける。それでおはんをみてでたんぼぼをあさぶ
でばんだであそぶ。つぎにたべて めいかい（もう一回）ねるのおきてでありく。
おわりです。

ももちゃんというのは、リノが提案した日本語クラスのマスコット。彼女は猫が大好きで、猫のぬいぐるみがインスピレーション源になっている。「(猫のぬいぐるみの) ももちゃんは、日本語の学校に行っていて、先生のお手伝いができる。あとで寝る。みんなを助ける。お花を見て、たんぼぼやパンダと遊んで、食べて、もう一回ねて、おきて、歩く。」そんなことを伝える文だ。リノは「読む・書く」に比べて「聞く・話す」日本語の経験が多いので、それを土台に

* 米国オレゴン州在住。

“自分が”聞き取った通りに文字にしている。

「先生、できた！」

無言でもくもくと書いていたリノが元気いっぱい手を挙げ、そのノートを見せてくる。この活動に対する意欲が溢れ出ているのがわかる。

ノートを見た私。まず、リノがたくさん書いたことを褒める。でも、私の心の中には大きな問いが生じていた。

「間違いを一つ一つ指摘して直させるべき？ どうしよう」

こういう迷いは、教師をしている人なら誰でも直面するものだと思う。

冷静に考えれば「書くことの目的は、間違えずに書くことじゃない。自分が伝えたいことを相手に対して表現するためのもの。間違えずに書くことはそのためのスキルだ。」と思い直せる。でも、目の前で子どもがたくさんスペルミスをしていると、一から十まですべて直すことが、自分の仕事であるような錯覚に陥ってしまう。でも…。

「今この子は、ことばの成長においてどの段階にいる？」

「今、日本語に強い意欲を持っているこの子とこの子のことばに対して、私はどんな向き合い方をしたら良い？」

目の前の間違いにすぐ飛びついて修正するのではなく、こんな風にその子の言葉の段階や動機も交えながら俯瞰することで、自分の見方が変わってくる。私はまだまだ訓練中だけど。

そんな場面に直面した日の帰り道、ふっと「自分が英語を学んだときはどうだったっけ？」という問いが浮かんだ。空には雲がかかった月が浮かんでいた。

私は小学校5年生ぐらいのとき、週に一度か二度、地元の英会話教室に通い始めた。ハロウィンなどのイベントがありテストはない民間の教室で、英語圏のネイティブの先生が教えてくれた。

ある時、先生に対して手紙を書くという活動があった。その教室では先生が何回か変わった

けれど、そのときの先生はオーストラリア出身のとても優しい先生だった。私は「その先生に対して英語で手紙を書いてやり取りする」という活動が大好きだった。自分が書いたことに対してお返事がもらえるのは嬉しかったし、先生の字はとてもキレイに整っていて、子ども心に感動してもいた。

私の英語のレベルはまだまだ拙いものだったので、手紙の内容は「先生へ、私は週末お父さんとつりに行きました。先生は釣りが好きですか?」とか「先生へ、私はディズニーランドが大好きです。先生はどのキャラクターが好きですか?」などといった程度のもの。文法や綴りの面では、いろいろ間違いもあったと思う。それらの間違いを直されたかは、今ではあまり覚えていない。でも、その活動を通して私は「英語なら日本以外の国の人とも伝え合えるんだ。英語がわかるっていい。楽しいな」と感じていた。ほんわかと英語に対する「好き」の思いが芽生えたのはあの頃だったのだろう。

その後、英語圏に留学することなどはなく、高校まで日本で英語を勉強した。その高校でも、英語をとりまくある一つの出会いがあった。

英語科のE先生は、おじいちゃん先生で少し突飛なところがあった。雨の降っていない日に長靴を履き、(健康のために)両腕を振り回しながら、「おはよう」などと声をかけてくれたっけ。英語教員室では一人毛布を持参して床に敷き、休み時間にそこで横になり休憩をとっていた。試験勉強が重視される高校で、休むということの大切さも私はこっそりその先生から学んだ気がする。

さて、高校に行っても私が一番好きな教科は英語だったが、E先生からある日突然声がかかり、「山崎、英字新聞を一記事切り抜いて、ノートに貼って訳してこい」と言われた。その日から私は、子ども用の英字新聞から好きな記事を選び、それを切り抜いてノートに貼り、その横に日本語訳を書くようになった。週に一度、朝、E先生のところにそのノートを持っていき見てもらった。先生は間違いも指摘してくれたけど、「(この訳は)上手い!」などと叫んで、良いところがあれば褒めてくれた。今考えると、忙しい高校の先生が一人の生徒のために朝の5分を使ってくれるって、想像できないほど貴重なことだ。

そんなある日のこと。私は料理が好きだったので、パンケーキの作り方の記事を訳して持っ

ていった。その中のあるフレーズ（たしか「Put」を使った簡単なフレーズだった）が、料理に詳しくないE先生には理解が難しかった。すると、先生が私に向かって「俺は料理が全くわからないから、（この記事の英語に関しては）山崎の方が専門家だ」と言ってきた。 — ズドン。

私はその時、ものすごい衝撃を受けたのだ。「英語の先生より、私の方が専門家？そんなことってあるの？」そんな戸惑いを感じながらも、心は高鳴っていた。

この二人の先生が私と向き合ってくれた経験は、今、英日翻訳をメインの仕事にしている私を形作る確かな根拠となっている。私の英語ということばの力は、これらのエピソードと一緒に時を刻み、今に至っているのだ。

その今、私は週に一度だけ「先生」と呼ばれ日本語を「教えて」いる。

どんな活動が、どんな瞬間が、どんなエピソードが子どもたちの将来に影響するのか。それは子どもたちが主体的に汲み取っていくことだから、私に強制力はない。けれど、私がどのように向き合うかは、子どもたちのモチベーションや好きという感覚に影響することがある。このことは忘れないようにしなきゃ。自分の心に確認のスタンプを押す。

今私がどのように対応したら、この子は自分でその芽を育てていけるのだろう、この子の見方や世界は広がるのだろう。そんな風に考えていたら、来週、リノの文を指導する私の向き合い方も変わってきた。

「そうだ！来週、こうしよう。」

見上げると、さっきの雲は流れて消え、明るい月が出ていた。